

ミドルヤードから見えてくるもの

清 邦彦

ミュージアムのバックヤードでやっていることを来館者に見てもらふ部屋がミドルヤードです。来館者とのやり取りが楽しいので昆虫のミドルヤードで仕事をしています。ミドルヤードに限らずミュージアムで一番多い質問は

「これ、本物ですか？」

本物を展示するからミュージアムです、模型や画像だけだったらテーマパークでしょう。などと答えたりしていますが、今の時代、来館者、特に子どもたちが出会っているものは画像や情報ばかりで本物に直接出会う機会が少ないことに気がつきました。

昆虫標本への反応にも気になるものがあります。

年配の方は子どものころ昆虫標本を作った経験があるので標本に対する違和感はありません。ただし「昆虫採集セット」の小ビンに入った液を注射すると誤解していますが、普通注射器は使いません。

標本作りをしたことの無い世代にとっては昆虫の体に針が刺さっているのが衝撃的なようです。

「生きてる虫に針をぶっ刺すのですか？」

どうも、生きた昆虫を針で刺し殺して標本箱に張りつける、というイメージがあるようです。「これ、みんな生きてたんですか？」

「どうやって殺したのですか？」

初めから死んでる生き物などありません、あなたも殺してから食べるでしょう、そんなことを言いたくなります、たまに言ってしまう。でもその、生きていたこと、死ぬことを意識したのは標本を見たからです。

動物園で、「この動物は死にますか？」

魚屋さんで、「この魚は生きていたんですか？」

お肉屋さんで、「このウシはどうやって殺したんですか？」

そんなこと聞いたりもしないでしょう。生と死は身の回りに日常にあるものですが、それを改めて意識したりはしません。それを意識したのは標本という非日常的なものを前にしたからではないでしょうか。もしかしたら標本を見るということは、その生物の特徴を知るなどということ以上に、生と死、自然、地球、そういっ

たもっと深いものに気づくきっかけを子どもたちに与えられる可能性を持っているかもしれません。

初めに書いたようにミュージアム、博物館にあるものは基本的に本物です。私たちも本物の人間です。本物の生き物を食べ、本物の水を飲み、本物の空気を吸っています。本物の地球に住んで、そこには本物の太陽の光が届けられています。今の時代、その本物にどれだけ接しているでしょうか。

子どもたちの知る動物、昆虫たちはほとんどが画像の動物、昆虫たちです。画像どころかアニメだったり着ぐるみだったり。食べるものはお店で買います。人工照明の中で暮らし、空気はエアコンで調節され、水は蛇口から出てきます、汚れ物、排せつ物などは水に流れてどこかに行ってしまう。

お店でトレイに乗ったお刺身からは海の中を生きて泳いでいた姿は想像できません。ハンバーグから、母親から生まれて牧場で草を食べて育て、そして屠畜されたなんて考えもしません。ご飯やパンは草の種ですよ。きれいな空気は森でつくられ、水は山から川を流れてきます。汚れ物は土になったり海に出たり、やがてまた森や川や食べ物から私たちに戻ってきます。

自給自足の時代と違って私たちと本物の自然との間に漁師、屠畜業者、お店、公共設備などが挟まっているので見えなくなってしまいました。本物が見えていないと、バランスの崩れ、資源の枯渇、環境汚染にも気づきません。

ミュージアム、博物館というところは本物を展示することで、本物の地球にいる自分を意識させる力を持っています。

あなたにとって「豊かな暮らし」とは何ですか？

同じように、自然とは、生命とは、あなたは何からできて何になってゆくのか、どこからきてどこへ行くのか。展示された標本を通して問いかけていことはもっともとあります。率直に言うなら、デザイン優先の展示にこだわるあまり、標本からのメッセージが伝わらないのです。もっと標本に語らせてください。